

表 6. 高類似群と低類似群の PGR 測定結果

	高類似群			低類似群		
	A組	B組	C組	D組	E組	F組
相関係数	.55	.05	.19	.45	.44	-.12
平均	.95	.65	.85	.35	.38	.25
標準偏差	1.21	.95	1.24	.80	.83	.72

$t=4.23$ ($df=142$, $p<.01$)

向き」「姿勢の後傾傾向」という項目に高く負荷した。第1因子を準言語（パラ言語）因子、第2因子を姿勢因子と命名した。前述の t 検定では、第1因子では有意差は認められず、第2因子の2項目で有意差が認められた。

5. PGR 測定の結果

メーターに表示される数値を各被験者ごとに、1 (0~1.0未満)、2 (1.0~2.0未満)、3 (2.0~3.0未満) と5秒間隔で記録した結果から、各組ごとに相関係数を算出した。表6. に示したように二者間の相関係数からは高類似群と低類似群の間に差異は認められなかった。次に各組の平均値 (0~3.0) を求めたところ、高類似群 (A組・B組・C組) と低類似群 (D組・E組・F組) とで有意差が認められた。この結果から表6. のように高類似群の方が低類似群よりも高い数値のPGR反応を示したことがわかる。高類似群は、情動がより多く喚起された結果、会話中に交感神経系の統制下にある汗腺細胞の働きが活発になったものと推測される。ただし、ここでは快・不快などの情動の方向性については、この結果からは明かではない。

IV. 考察

本研究は二者間の態度と行動傾向の客観的類似性が会話行動に何らかの影響を及ぼすという予測のもとに実験を行った。具体的には、続の開発した性格テストに基づき、得点の差違の大きい群 (行動傾向の低類似群) と得点の差違の小さい群 (行動傾向の高類似群) をペアーにして、実験室で相互作用を行わせ、その会話行動過程を観察、記録した。その結果、言語行動の観察評定では、高類似群では低類似群より、自分の考えを述べ、

相手に質問することが明らかになった。また、非言語的行動の観察評定においても、高類似群は低類似群よりも、姿勢がリラックスしており、体の向きが正常で適切であることが明らかになった。更に被験者による自己報告においても、高類似群は低類似群よりも、雰囲気のを和らげるように振る舞った、相手の意見を聞いてから発言したと報告している。また、相手の腰を折った、相手の言うことに何にでも反対した、相手にしらけた態度を示したといった、否定的な行動については、高類似群の方が低類似群よりも得点が低かった。つまり、高類似群の被験者は言語行動のレベルで、自己開示の度合いが高く、非言語的行動のレベルで、よりリラックスしており、自己報告のレベルでも親密度の高い、肯定的行動を取ったと報告している。

こうした研究結果は、脇本・藤原 (1997) が見出した証拠とも一致している。つまり、性格テストで客観的類似性の高い会員同士がゼミナールの教室場面で近くに着席するという知見である。着席行動が親密性の表れだと解釈すれば、類似性と親密性の間には意味の有る相関関係が存在すると考えられる。直観的に他者との類似性を感じた者同士が、無意識的に牽引され、引かれあったのかもしれない。

本研究の結果も含めて、被験者には、相手について何の情報も与えられていないので、何故こうした結果が生じたのかを説明する社会心理学の理論やモデルは今のところ存在しない。脇本・藤原 (1997) でも指摘したように、恐らくは、服装、ヘアスタイル、メイク、姿勢、さらには表情やアイコンタクトも含めた非言語的手がかり情報や相互作用事態での相手の言語反応や会話等を手がかりにして、相手の性格についての推測や判断を行なったものと推測される。認知できる相手の雰囲気から、自己と相手との類似性を推測し、自己と類似性の高い他者に親密性や魅力を感じたためかもしれない。恐らくこうした判断は、分析的というより、直観的なものに基づいていると推測される。高類似群の方が低類似群より、親近性や親密性の度合いが高かったということの部分的な証拠は、精神反射電流の結果において、前者が高い情動反応を示していることから明らかである。ま